

■巻頭言

住民と行政の橋渡し役になりましょう

筆者は道北技術士会の幹部として、公務員時代からのご苦労された思い出を通して、これからの技術士のひとつのあり方として『住民と行政の橋渡し役になりましょう』と提案され、「住民に親しまれるインフラづくり」を「住民との協働」や「住民参加型」でと綴られています。このような活動を通して技術士の知名度も向上していくことでしょう。期待しています。

この巻頭言を拝読しながら、“「橋渡し役」、「架け橋」というイメージから二人の偉大な大先輩を思い浮かべておりました。一方は新渡戸稲造博士で、「私は太平洋の橋になりたい」と言われ、アメリカに渡って『武士道』を執筆され、日本人には優れた精神があることを世界の人々に紹介し、札幌でも遠友夜学校を設立して学ぶことのできない子女への教育にも力を尽くされた方で、後に国際連盟事務次長も勤められていらっしゃる。

もう一方は廣井勇博士で、小樽港北防波堤の建設でのコンクリートの試験ピースでも有名ですが、完成後の式典に作業に携わった方の多くの人たちが招かれていないのに気づき、その人たちを自費で慰労されたとの逸話もある方で、後に東京大学の教授や土木学会の会長も勤められていらっしゃいます。

お二人とも札幌農学校の二期生という共通点もありますが、弱い立場の人たちにも当然の事のように手を差し延べられている生き方にとっても敬服しています。ある市民参加の勉強会で、北大の総合博物館に見学に行ったときのことでした。札幌農学校の当時の学生のノートが展示されていて、ご婦人のひとりがそれを見ながら「昔の学生さんは偉かったのね」とつぶやかれたことが心に響いたことを覚えております。

(札幌農学校に魅せられて：MK)

■特集

「産学官連携」「異業種連携」の取り組み事例の紹介

近年の社会の土木技術に対するニーズは、単に企業、官庁、或いは大学などの研究機関が単独で対応するにはあまりにも多様な時代になってきている。従って技術全般にわたる俯瞰的かつ総合的な力が必要で、産学官の連携が不可欠であるといえる。今回の事例については、企業や各機関が良く連携して立派な成果を上げていると感じた。

異業種連携については、これも産学官連携と相通ずることであるが、どちらもそれぞれ違う分野の技術者を一堂に会し、意見をまとめていくことはかなりのエネルギーが必要である。しかし立派にプロジェクトをまとめられ、実用化に目処がついたことに敬意を表する。これらの成果が立派に社会の為に役立つことを期待する。

ただ蛇足ではあるが、「安全、安心、健康」というキーワードについて、「安全」、「安心」と並べた場合、「健康」という言葉にややしっくり来ないものを感じた。それが今回の報告で、どの部分を意味するのか読み取れなかった。いずれにしても、もう少しぴったりするキーワードがあるような気がする。今後とも各方面で連携を深め、「安心・安全で質の高い生活の出来る国」を目指し成果を上げて頂きたい。

(K. T)

■報告

業務委員会「第 2 回異業種交流会の開催」

業務委員会が弁護士会などと異業種交流会を行っていることは、過去の紙面を見て知っていました。今回は北海道本部会員の機械部門の方々と結成されている MC 会です。そのような会があることは初めて知りました。北海道では公共事業が主産業であるため、公共事業に関わる技術士の数が圧倒的に多

く、公共事業に直接関係しない製造業の技術士の数が極端に少ない傾向にあると思います。今回の報告を読んで、製造業を主とする機械部門の方から見た技術士や業界に関する意見を知ることができました。

今後、技術士以外の異業種交流会だけではなく、今回のMC会のように技術士の人数が少ない部門との交流会を開催していただき、このような意見を紹介して欲しいと思います。

by OTN52 (別称：のんべ52)

■寄稿文

東日本大震災視察と大津波災害復旧・復興に思う！「災害と技術者倫理」

今回の大震災で防潮堤により被災を免れた譜代村と万里の長城でも守れなかった宮古市田老地区のことが書かれており、災害というものの非情さを象徴しているように思われる。両方の自治体の長は周囲の反対を押し切り、大変な苦勞をしてこの防災施設を完成させたにもかかわらず、結果が違ってしまったことに無念さを禁じ得ない。

我々の住む日本列島は地球上の14枚のプレートの中の4枚が、せめぎ合うところにある。つまり、マンタルのエネルギーの掃出し口である。そのため世界の巨大地震の2割が日本で起きている。地球上でもっともデンジャラスな地域である。しかし、その分世界で最も美しい国である。いわば、国立公園ならぬ世界立公園で、人が住んではいけないところなのかもしれない。しかし、我々は住んでしまったのである。

それならば、藤井聡の列島強靱化論に示す通り、レジリエンスな国にしなければならない。歴史が示す通り、東日本大震災に連動して20年以内に起こる東南海地震や首都直下型地震や富士山噴火に耐えうる強靱な国土を造りあげなければならない。それが世界の聖地に住まわせてもらっている者の務めではないだろうか。

そんな思いを胸にしながら、週末被災地に集まって行われる大学の同窓会で、現地をじっくり見てきたいと思う。

(いつものおせっかい男MS)

■活動レポート

エンジョイ・サイエンス研究会「研究会として活動を開始しました」

最近、5歳の息子を連れて札幌市青少年科学館へ行ってきました。暑い初夏の日曜日だったからでしょうか。思いの外、子どもたちが少ないように感じました。『子どもたちの理科離れ』か『理科離れた親』の影響なのかは定かではありませんが、技術立国日本の次世代の担い手である子どもたちが理科を嫌いになることは由々しき問題です。

遊び心を持った研究会員のみなさまへ。どうか、研究会の活動が末永く子どもたちに喜んでもらえるように。そして、大人たちも子ども目線で楽しめる、そんな楽しい活動であることを願っています。

(H. H)

リージョナルステート研究会「新たなリージョナルステート研究会」

リージョナルステート研究会の平成23年度総会と平成24年度活動計画の紹介です。本研究会の発足は平成10年なのでですね。当時、私は技術士会(正確には北海道技術士センター)に入会していましたので、「なんか難しそうな研究会ができるんだ」と、思ったのを覚えております。14年間もの継続活動に敬意を表します。

本研究会はこれまで、教育分科会、環境技術システム研究分科会、地域主権分科会の3分科会で活動されていたのが、本年度より教育分科会が独立するというので、今後は2分科会の活動になるのです。今話題の自然エネルギーを扱い分科会と北海道の経営資源を考える分科会で、それぞれ重要な研究テーマだと思います。新たに立ち上がるエンジョイ・サイエンス研究会(前教育分科会)を含めて、更なる発展を祈念しております。

(Y. K 血液AB型)